

「集団主義」という錯覚：日本人論の思い違いとその由来

Illusion of Groupism: Misunderstanding of the Japanese and its origin

高野 陽太郎（著）/2008 新曜社

新井 元 ARAI, Hajime

● 放送大学
The University of the Air

● 早く飛び込め！

ある豪華客船が航海の最中に沈みだした。船長は乗客たちに速やかに船から脱出して海に飛び込むように、指示しなければならなかった。

船長は、それぞれの外国人乗客にこう言った。アメリカ人には「飛び込めばあなたは英雄ですよ」

イギリス人には「飛び込めばあなたは紳士です」

ドイツ人には「飛び込むのがこの船の規則になっています」

イタリア人には「飛び込むと女性にもてますよ」

フランス人には「飛び込まないでください」

日本人には「みんな飛び込んでますよ」

（早坂隆 『世界の日本人ジョーク集』中央公論新社（中公新書ラクレ）、2006）

いわゆる「国民性」を揶揄した話は多い。そのテの話が面白く聞かえるのは、「○○人は△△」で「□□人は××」だというステレオタイプがその話題を共有する人々に共通認識としてあるからである。日本人がこの手のジョークに現れる際には「日本人は集団主義で、集団行

動を重んじる」という役回りを担わされる事が多い。上記でオチとして扱われた日本人もその例である。いつの間にか日本人にはそういうイメージが付きまとい、今やその印象はグローバル・スタンダード。また、そう思っているのは日本を外から見ている外国人ばかりでなく、日本人の中にもそう考えている人が多いようだ。ところで、もしも日本人は我々が思っている程「集団主義」的でないと証明されたとしたらどうであろうか？パーティーでの定番ジョークがひとつ消えるばかりではない。日本人の国民性に関する認識は大きく覆るであろうし、また、そのような誤解がどうしてこのように広く流布しているのか、おおいに疑問となる。本書は、認知心理・社会心理を専門とする研究者が、その疑問に真っ向から立ち向かった結果である。

「広く流布する日本人論の検証を通して明らかになった、状況の力と思考のバイアス。／国家、民族間に溝をつくりだし、しばしば政治的な対立を激化させる文化的レッテルへの警鐘。」と本書の帯にあるように、日本人＝集団主義的という「通説」が実証的な研究によって覆されたというのが著者の訴えである。本書の構成は以下の通り。

第1部◆「日本人＝集団主義」説

第1章 日本人論

第2章 日本人論批判

第2部◆事実の検証

第3章 実証的な研究

第4章 論争

第5章 「集団主義的な文化」再考

第6章 エピソード

第7章 昔の日本人

第3部◆通説はなぜ成立したのか？

第8章 戦時下の集団主義

第9章 思考のバイアス

第10章 オリエンタリズムとしての「集団主義」

第4部◆「文化」の再検討

第11章 「国民性」

第12章 文化ステレオタイプ

第1部で、これまでの日本人論を総括し、その批判までをすませた著者は、勇躍、多くの人々に無批判に支持されている「日本人＝集団主義説」の誤謬を正すべく、様々な分野で喧伝されるその「証拠」とされるものがいかに危ういものかを説いていく。実は、このようなテーマで心理学者が書いた本は他にもあって、評者も山岸俊雄による『心でっかちな日本__集団主義という幻想__』（日本経済新聞社、2002）を読んだ事がある。こうした本の中で取り上げられる実験結果から、彼らが言いたい事は「アメリカ人と比較しても、日本人は決して集団主義的ではない（集団を利するような行動を取るとは限らない）、むしろ日本人の方が個人主義的な場合すらある」という事である。そこで行なわれる実験は次のようなものである（p.63-64）。

実験では、被験者は四人一組になり報酬ゲームを行なう。被験者は、実験者から元手となる資金をもらい、各自ゲームに参加する。被験者はそれぞれ、その資金から自分の出資額を決めて出資する。他の3人の出資した金額の二倍を三等分した金額が自分のものとなる。この実験では、アメリカ人の被験者は平均して手持ち資金の56%を出資

し、日本人は平均44%を出資した。この実験結果は、「日本人＝集団主義者」とすると意外なものである。なぜなら、この出資ゲームでは自分の利益より集団（この場合は被験者全員）を優先して、自分の出資金を増やせば増やす程儲かる仕組みだからである。これは、日本人が通説で言われるように集団主義的なのではなく、むしろ個人主義的な証拠である。

高野はここでは述べていないのだが、この被験者達は実験中も実験後もお互いに顔を見合わせる事のないように配慮されていた。山岸の著書を読んだ時も疑問に思ったのだが、これは日本人が個人主義的であることを証明しているのだろうか？これは、個人主義ではなくて単なる「利己主義」なのではないか？勿論、高野も「個人主義」「集団主義」の定義の難しさに触れ、個人主義の中核的意味に「集団より個人を優先すること」を当てている（p.317）。では、日本人の集団主義はどのような場合でも表出するという前提があるのだろうか。しかし、次のような疑問も沸く。「日本人の集団主義は、いわゆる身びいきであって、このような顔も知らされないような赤の他人についてはなんら顧慮される事はない」のだとしたら？実際にこのような反証の試みも出ていて、社会心理学的に言うと、これは「実験結果が通説を支持しなかったのは、被験者がおなじ内集団のメンバーではなかったからだ」となるらしい（p.92-93）。しかし、読み進んでみると「内集団だからといって協力率が高まることはない」という研究結果も報告されている。細かい説明は省くが、その実験では被験者は日本人とアメリカ人がほぼ半数の割合で、皆がID番号で識別されて、本名を名乗る事も顔を合わせる事もないように配慮されていた。ただし、インターネット上で行なわれたこの実験は、ID番号のみ表示されている場合とID番号と国籍が表示される場合とがあった。この状況では「同国人なら内集団のメンバーとして意識されるだろう」と考えられた。結果は協力率に差が出なかった。評者の疑問は、ここで解かれるどころか、かえって大きくなってしまった。同国人なら内集団と無条件に考えられる根拠が、ここでは何も示

されていない（ここでは高野が山岸の実験を引用しているため、原典にはあるのかも知れない）。

戯れ歌に「品川で／もうかき捨てる／旅の恥」というのがある。旅の恥はかき捨てと言われるように、とかく日本人は自分の世間を離れると、それまでの心遣いや配慮をかなぐり捨ててしまい、みっともない行動を堂々としてしまう。江戸から最初の宿場町である品川に来てしまえば、そこはもう旅先であり「旅の恥」もかき捨て始めてしまう、という意味であろう。日本人にとって、他の日本人は無条件に内集団なのだろうか？品川宿の住人も自分の世間の内なら、恥ずかしくて旅の恥などという気持ちにもならないだろう。だが、品川でそうしたことにおよんでしまうのは、江戸から目と鼻の先の品川でさえそこは赤の他人の住む町だからだ。まして、相手が名前も分からず顔も見えない相手だとしたら、それが日本人だからという理由だけで内集団メンバーと認識するのだろうか？しかも、被験者は大学生だという。彼らは、高等教育も受け、国籍や出自によって人に偏見を持ってはいけなくも思っているかも知れない。これは果たして実験として適切な条件を満たしているのだろうか？もし、この見立てが正しいのなら、日本の学校では「いじめ」もないはずだ。なぜなら、学校の児童生徒は、例外はあってもその殆どが同じ日本人だからである。

評者は、高野が「日本人＝集団主義」の誤りを正そうとしている姿勢はおおいに評価するが、その証明は必ずしも上手くいっていないように思う。しかし、日本人はいままで通説の通り集団主義で行動していると考えている訳でもない。日本人の行動規範は、「個人主義」でも「集団主義」でもなく、阿部謹也や佐藤直樹の言う「世間」意識であると考えている（少なくとも、日本人の行動規範を最もよく説明しうる概念である）。この「世間」を構成する原理として次の四つがあげられている。「贈与・互酬の関係」「長幼の序」「共通の時間意識」「呪術性」（阿部謹也『近代化と世間__私が見たヨーロッパと日本__』（朝日新書）朝日新聞社、2006／佐藤直樹『暴走する「世間」

__世間のオキテを解析する__』バジリコ、2008 他参照）。この「世間」は個々の日本人によって違うばかりか、同じ人間でもその場その場によって融通むげに変化するものである。それを念頭において先の実験結果を見ると上手く説明が出来るのではないか。つまり、実験によって現れた日本人の「個人主義」的な行動は、内集団（＝世間）を離れた日本人が「孤立」した時には、つまり周りが赤の他人だけになってしまえば結構「利己主義」に走ってしまうという単純な事実であり、アメリカ人が示した「集団主義」な協調的行動は、その実験の他の被験者が自分の様に個人主義者であろうという予測のもとに、個と個の間で期待されている「契約」的行動をとった結果であるというのが評者の解釈である。ここで、社会心理学という「個人主義」は単純に「利己主義」と同義ではないかという指摘もあり得るだろうが、後に高野の行なうエピソードの批判でも判るように、高野自身時に混乱を許す形で使っている。実は、この用語の混乱はこの手の話には常に付きまとうもので、辞典にさえ次のように書かれている。「個人主義【こじん-しゅぎ】(individualism) 個人の自由と人格的尊厳を立脚点とし、社会や集団も個人の集合と考え、それらの利益に優先させて個人の意義を認める態度。(中略) 俗に、利己主義と同一視されるが、基本的に別である」(『広辞苑 第六版』)。未だにこうした誤解は根深い。「戦後教育の行き過ぎた個人主義が日本をダメにした」と言っていた某首相は教育基本法を改訂したが、彼は後に「行き過ぎた利己主義」と言い換えるようになった。行き過ぎた利己主義が良くないのは当然ではないか。それでは、高野の言及している日本人はどうして集団主義的な行動をとっているように見えないのであろうか？社会心理学で言われる「個人主義」者や「集団主義」者も西欧由来の概念であり、そこで考えられている個人主義者は言うまでもなく、集団主義者も「確固とした信念を持った集団主義者」であるはずである。しかし、実際に世間の掟の中で生きている日本人がまさに状況の中で、複雑にその行動規範を変更しつつ（つまり準拠すべき内集団を頻繁に乗り換え）

行動するとしたら、その姿は「西欧型の集団主義」者とは映らない。ここに、西欧由来の概念で異文化を理解する難しさが典型的に現れているとも言えるだろう。それにしても、高野も山岸も「日本人論」について論ずるのであれば、何故阿部謹也他の「世間」論に言及していないのであろうか？ 評者は、近年の日本人論では阿部や佐藤の著作群がもっとも優れていると思っているのだが……

高野の「日本人＝集団主義」説への攻撃はまだ続く。「第6章 エピソード」では、日本人が集団主義であるというエピソードが説得力を持つのなら、同じように日本人が個人主義的であるというエピソードもまた多数存在するという姿勢で書かれている。しかし、ここで高野が挙げているエピソードが、どうしても日本人＝個人主義の証となっているようには見えない。例えば、高野は日本人の中にも「『集団の和』をやぶって内部告発を辞さない組織人も少なくない」(p.157-158)として、牛肉偽装を内部告発した人物を例として挙げているが、その内部告発をした冷蔵会社の社長が、その後取引企業から一斉に手を引かれ一時廃業に追い込まれた事はどう考えるのであろうか？ 他にも愛媛県警で警察内部の裏金作りを固辞し、巡査部長から昇進をせず、嫌がらせのような配置転換を長年受けている人物もいる(朝日新聞 2005年2月14日付け、2008年5月28日付け)。日本人が集団主義的でないなら、自らの良心に従い内部告発に踏み切った彼らがこのような仕打ちを受けるのは何故なのか？ これは、トラブルメーカーとなった隣人と関わり、その仲間と思われて自らの世間を狭くするのを恐れているからではないのか？ さらに、「個性的な日本人」も沢山いるとして例を挙げているのだが、それがイタリアのピザ職人コンテストで優勝した日本人であり、イタリアやアメリカの大企業に引き抜かれ社長となった日本人であり、アメリカの大学で英文学の教授となった日本人である。このエピソードを並べられ、まず評者が感じたのは「個性的な日本人は海外でばかり活躍しているな」という事である。高野の言いたい事は、個性的な人間は国民性

とは関係なくあらゆる場所に現れるという事なのだが、評者もその通りと思う。しかし、個性的な日本人が海外でばかり活躍しているは「海外で個性的な日本人が認められるのは、その個人の国籍や人種、民族や宗教ではなく個人の能力を正当に評価する個人主義的な欧米である」という証明になるのではないか？ 確かに、ここでの高野の主張は「個性的な日本人」という誤った偏見の打破にあるのだが、因らずも欧米社会の「個人主義」的価値観の証明となっているのは皮肉である。

他にも、高野が日本人は必ずしも集団主義的な集団ではない事を証明するべく挙げている例は多い。この場ではその全てを列挙し、集団主義ではなく世間を核に説明するのは物理的に無理だが、高野は「日本人＝集団主義」という誤解が広く受け入れられた理由として「思考のバイアス」をあげている(第9章)。評者は、このバイアスによる偏見の流布のメカニズムにも疑問を持っている。何故なら、一般的な日本人が身の回りの人々を見て日本型「集団主義」を感じるであろう場面は、次のような事例と考えるからである。「36戸の小さな集落で、ある集会への参加を拒んだところ、そうした一部の村人がゴミ収集箱の使用や山菜採りを制限され、村八分状態にされた」(朝日新聞2007年10月18日付け)。「排除される事のつらさを良く知っているはずの被差別部落の人間と婚姻関係を結び、その地域に入った外部の人間は決して無条件に受け入れられる訳ではなく、いつまでも『入り人』として疎外感を味わう」(角岡伸彦『被差別部落の青春』講談社文庫、講談社、2003)。「夏に引退した3年生の不祥事の為に、甲子園での試合を辞退する高校野球チーム」(朝日新聞2004年6月22日付け)。「イラクで武装勢力に拘束され、帰国前から『自己責任』や『自作自演』との大パッシングを受けた日本人」(佐藤真紀他編『イラク「人質」事件と自己責任論―私たちはこう動いた・こう考える―』大月書店、2004)。「『薄情もんが田舎の町にあと足で砂ばかりけるって言われてさ／出てくならおまえの身内も住めんようにしちやるって言われてさ／うっかり

燃やしたことにしてやっぱり燃やせんかったこの切符／あんに送るけん持っってよ／滲んだ文字 東京ゆき」(by 中島みゆき)。これらの事例も、やはり高野の言う思考の諸バイアスである「対応バイアス」「確認バイアス」「符号化特性原理」「可用性バイアス」「信念の持続」によって説明されるような偏見の醸成によるものなので、日本型「集団主義」(＝世間)の現れと理解するのは、やはり結果として根拠のない通説を強める事になってしまうのであろうか(ここでは、高野の議論に合わせ、戦中の日本を念頭に置いたり、安易にアメリカとの比較で導き出されたりしたものではないと思われる例をあげた)。

評者は、これらの事例を(高野は嫌がるだろうが)やはり日本独特の「世間」という構造の中で生まれた現象であると判断している。高野も明言しているが、彼自身は、この本を通して「日本人は集団主義的な言動をしない」と主張したい訳ではない(p.305)。しかし、実証的研究(実験)によれば、日本人は必ずしも広く言われるように集団主義的な行動を取る訳ではない、というのが著者の主張である。ただ、上に述べたように、その実証研究の結果の解釈によっては、未だ日本人は日本的な意味での集団主義＝世間で生きている事が証明されたと言う事も出来るし、実証研究によっては、果たして実験として最低限の公正な条件を備えていたかも疑わしい。高野は、「第4部「文化」の再検討」の中で次のように述べている。「状況に応じて行動を変えろということ、適応的に行動しているということなのである。わたしたちはみな、その場ふさわしい(ということは、つまり、自分の利益になる、あるいは、不利益にならない)行動は何かということを主体的判断して行動している。状況が変わると、どういう行動がふさわしいかも変わるので、わたしたちがとる行動も、状況に応じて変わることになるのである」(p.269)。だから、国民性といったものは歴史的な状況、環境的な状況といった条件の元で移ろいやすいものだから、そういう確固とした性質が存在するか疑わしいという論を展開してい

る。しかし、「状況に応じて?」の記述は、むしろ高野らの実験の不完全さを説明するための、最適な批判にもなりうるだろう。つまり、日本人の集団主義は世間と言う内集団でのみ発揮されるのだから、生活世界から実験室へ移されるという「状況の変化」の元では観察されない、という発想は思い浮かばないのだろうか?さらに、その後にくく、「アメリカ人の個人主義的な国民性」(p.274-)の項にいたっては、アメリカ人の個人主義的な特徴も状況の産物と捉え、「米英戦争が終わってから、ソヴィエト連邦が大陸間弾道弾を開発するまで、百数十年ものあいだ、アメリカ本土がさしせまった危険にさらされたことは一度もなかった」として、その結果、アメリカ人の個人主義の特徴は状況要因だけで十分に説明がつくとしている。残念ながら、こうしたアメリカ史の理解は単純に事実として誤っているばかりでなく、誤りであるが故に状況要因説をかえって疑わしいものにしてしまっている。「アメリカ本土がさしせまった危機にさらされたことは一度もなかった」どころか、アメリカ史はずっと危機の連続だった事を思い出してもらいたい。絶え間ない移民の流入。南北戦争(南北戦争での死者は、米英戦争から第二次世界大戦までアメリカが関わった他の全ての戦争での死者より多いというのは有名な話だ)。宗教各派の抗争。人種問題と、正にアメリカは崩壊の危機を何度もくぐり抜けて今に至っているという歴史的事実は軽視すべきではない(アーサー＝シュレージンガー、Jr. 著、都留重人監訳『アメリカの分裂—多元文化社会についての所見—』岩波書店、1992)。むしろ、そうした危機の中で様々な文化的歴史的背景を持った人々が平等に扱われる思想的基盤として西欧的個人主義は発展していったのであって、それは状況から普遍的とされる理念が生み出されたと考えるべきであろう。ただ、高野は社会心理が専門なので単にそうした歴史を知らないとも考えられる。それはしょうがない事だが、外国人の名前を使って日本人の集団主義を反証している部分は(p.157/p.244)、あまりにも内容が不自然なので原典にあたってみたが、高野の引用の仕方や解釈の仕方は少々強引にすぎて、人文科

学の最低のルールとして疑問を持ったので特にここに記しておく（朝日新聞1999年4月21日付け、1999年5月12日付け）。

1969年7月20日、アポロ11号は月着陸に成功し、人類は初めて地球以外の天体に降り立つ事になった。これは人類の歴史上最も輝かしい功績の一つであろう。ところで、この月面着陸が全てアメリカのヤラセであったと信じている人々がいるらしい。世界中が固唾を飲んで見守っていたあの中継は全て映画セットで行なわれた作り事であるという陰謀論の一種である（副島隆彦『人類の月面着陸は無かったらう論』徳間書店、2004／山本弘他『と学会レポート 人類の月面着陸はあったんだ論』楽工社、2005 他参照）。この陰謀論の面白い所は、一見、陰謀を告発する人々の論が科学的な装いをしている部分かと思う。例えば、「中継されて来た映像の〇〇と□□が矛盾している。だからこれは作られたヤラセの映像の証拠だ」という訳だ。実際には、こうした指摘は明らかに誤解や無知に基づいていることが多い（因みに、評者自身はアポロの月面着陸はあったと考えている）。同じ材料を前に、陰謀論者と肯定者が全く逆の結論に至るプロセスが興味深いとも思うし、その一方で陰謀論者のわずかな思い込みや予断が大きな誤りを導き出す場面は、物事の理解というものの危うさの好例だ。同時に、ある意味で怖いと感じるのは、その誤りを指摘されてなお自分の考えを変える事のない人間の頑な姿である。「日本人＝集団主義」の話に戻れば、高野の本を読んだからといって、それまで集団主義的日本人観を持っていた人がその考えを改めるかと言えば、それは難しいだろう。また、この著作をめぐって多くの反論が出る事になるであろうが、評者は実証研究の手法や結果については、その実験の条件が整えられている限りで全く異存はない。むしろ、山岸俊男の著作に関しては学ぶ事も多かったし、実証研究の今後の可能性も感じる事の出来る好著だと思っている。評者が問題にしているのは、主に実験結果の解釈である事をここでもう一度確認しておきたい。評者は、実験心理学の専門知識を持ち合わせていないが故に、上記の諸判断

はとんでもない誤りかも知れないし、自ら気づかない偏見やバイアスもあるだろう。しかし、同じ材料を得てなお、日本人＝集団主義のある部分はまだ「世間論」の範疇で有効だと思う。むしろ評者にとっては「世間論」を強化する確証となった。なぜなら、先にも述べた通り「個人主義」「集団主義」は、その大前提となる人間モデルが西欧的な人間観に依っている為に、日本人の行動規範を説明しきれないという決定的な弱点があるからであり、その弱点を補強するのが「世間論」だからである。自然科学でもそうだが、ある現象があつて、それを説明するのにいくつかの理論がある場合、より合理的、より単純に説明出来るものをさしあたりの仮説とするのが正しい姿勢であろう。評者の場合、たまたまそれが、以前から知っていた「世間論」であったという訳だ。ところで、高野は物理学者マックス＝プランクの次の様な言葉を引いている（p.221）。「重要な科学的革新というものは、反対者を徐々に味方にしたり転向させたりすることによって前進することはまれである。・・・現実にかかるのは、反対者が徐々に死んでいくことと、始めからその考え方に親しんだ若い世代が増えることである」。評者自身は、より適切な解釈があればそちらに転向する事は全く構わないと思っている。評者の死を待たれる必要はないので、ご心配なく。

（文中敬称略）